

甲府市・中津川市のリニア駅整備・まちづくり

11月29日、名古屋市ポートメッセなごやにおいて国交省中部地方整備局・中部圏広域地方計画推進室による「リニア時代を見据えたまちづくりシンポジウム」が開催され、その中でリニア沿線の甲府・飯田・中津川の3市長をパネリストとする「リニア時代を見据えたまちづくりシンポジウム」が実施されましたので聴講いたしました。

紙面の都合上、両隣りの甲府市・中津川市長の駅整備・まちづくりの報告をまとめます。



「リニア時代を見据えたまちづくりシンポジウム」
(平成30年11月29日 ポートメッセなごや)

1. 対流の拠点としてのチャンスを活かす ～甲府市～

リニア山梨県駅の特徴は、中央自動車道と「ダルマのように連結すること」(樋口市長)。ここに中央道のスマートインターを設置し、「ヒトの流れ(人流)と物流の一体的拠点形成を目指す」(同)。リニア駅周辺には甲府市内6工業団地のうち5つが駅近くに立地しているため、様々な交流、連携を強化し、企業活動や情報・知識を提供することにより来訪者に対し「新たな価値」を提供することを目指す。また世界遺産の富士山や南アルプス、昇仙峡、大菩薩峠などを含む県内の国立公園、国定公園への30分以内のアクセスを図ることとしている。

駅周辺整備は、リニア駅北側の14ha(スマートインターチェンジやパーク&ライド駐車場、駅前広場)、同南側10.5ha(観光交流・産業振興関係施設)をリニア駅周辺とする。更にその周辺の90haを「スマートシティ構想」として居住やリモートオフィス等質の高い受け皿となるよう開発することとして山梨県と協議を進めている。

二次交通については、リニア山梨県駅と周辺各圏域をどのようにつなげるか、トヨタ自動車を始めとする企業グループとのプロジェクトチーム結成により燃料電池バス(FCバス)導入のための研究会を発足させている。また県内における自動運転の実証試験の実施に向け、県内のバス事業者、ICT企業に山梨県、市町村を加えた自動運転プロジェクトチームを立ち上げたところである。



樋口甲府市長

「世界に開かれた交流拠点」



甲府中央スマート IC と周辺幹線道路



2. 東西南北の交通結節点として ～中津川市～

中津川市は、古来中仙道の宿場町として、中央自動車道、JR中央西線、国道19号線など信州、飛騨、三河、尾張へと繋がる道路網と、東西南北交通の結節点であった。リニア岐阜県駅予定地はJR中津川駅から西に5km離れており、最寄のJR美乃坂本駅より200mのところを位置する。リニア駅予定地は主に農地となっている一帯であるため、道路網の脆弱性があり、在来線との一体的開発、交通結節点としての整備を目指し、基盤整備事業に今から取り組んでいる。また、リニア沿線で唯一、分解・組み立て工場を持つ施設の中部総合車両基地がリニア駅より1.5kmの丘陵地に設置され、雇用創出や関連企業の進出、観光資源としての活用、地域への移住・定住などが期待される。

「将来都市構造」基本方針によりJR中津川駅を中心市街地エリアとし、広域交通拠点としてのリニア駅との連携を強化することで活性化、賑わいを図る。リニア駅周辺は、広域交通拠点としてストレスなく各地へ繋がることとし、商業機能は可能な限りコンパクトにし、中心市街地エリアへと人が流れるようにする。

濃飛横断自動車道は、中央自動車道を分岐して、下呂市、郡上市を通り東海北陸道に繋ぐ高規格道路で、中津川市内の約5kmの区間が現在事業化されている。JR中津川駅・中心市街地から車両基地を経て濃飛横断自動車道、リニア駅を経て恵那市へ向かう都市間道路、濃飛横断自動車道とのインターアクセス道路の2道路をアクセス道路として整備する。また、中仙道馬籠地区に近い中央道神坂パーキングエリアにスマートインターチェンジを設置し東濃地方から信州方面の観光の基点とする。

3. 「海なし県」の3市長の出会い

3つのリニア中間駅とも、中心市街地から3～7km離れた郊外に設置されます。リニア駅と中心市街地、域内各地とのアクセスが課題であると共に、昨今の人口減少やそれによる公共交通機関の縮小に直面しています。

「海なし県」を自称される3市長さんでしたが、海こそなければ、それぞれの豊かな地域資源を今後の取組みで花咲かせる気概を感じられた報告・発言でした。



青山中津川市長

リニア開業に向けた市内骨格道路網の整備



リニア開業に向けた拠点整備箇所



牧野飯田市長

(飯田信用金庫 地域サポート部 リニア対策課 加藤 修平)